

巻 頭 言

「進化の頂点に立つ私たち人間のことを『ホモ・サピエンス』といいます。」

先生にこういわれて、「ホモ・サピエンス」ということばを憶えたのはいつ頃のことだったのだろう。ホモ・サピエンスが登場する以前の原人は「ホモ・エレクトス」、つまり「直立する人」と名づけられ、その後の人類とは区別されている。しかし地上に2本の足で直立歩行することが人間の大きな特徴であることはたしかである。その後のネアンデルタール人から、「ホモ・サピエンス」つまり「知恵ある人」と呼ばれている。学術名は「ホモ・サピエンス・ネアンデルターリス」である。それに対し私たち現生人類には「ホモ・サピエンス・サピエンス」という正式名がつけられている。サピエンスがふたつ、知恵が2倍に増えたからだろうか。戦争や貧困、自然破壊、差別の現状を思うといささかありがたすぎる名前に思えてくる。

サピエンスたる指標は、ひとつにはコトバを語る能力、ふたつめに抽象的な推論能力とを挙げるのが一般的である。ここから、この言語と思考の2大特性をいかに発展成長せしめるかが、人間である限りでの人間に与えられた使命であると考えられている。この考えは西洋では特に強い人間観であろう。

ところでラテン語のサピエンスの第一義は「味わうこと」である。ものの味わいを知り、ことの真偽・善悪をかぎわけることができるゆえに、その能力をもつものをサピエンス、知恵者トラテン人は呼んだのである。このことばはそのような由来をもっている。

「味わう人」としてのホモ・サピエンスは一体なにを味わうのだろうか。わたしには、人間はまず自らの『状況』を味わうものであるように思われる。そこには私があり、他の人があり、いろいろなものごと、できごとがある。こうした自分が直面する状況のひとつひとつをじっくりと味わい吟味してゆくことが、人の人たるゆえんなのではないかと思われてならない。人はなにごとかを味わうとき、そのものを口中に含み黙さざるをえない。

喧噪とざわめきのことばをみずから発しつつ味わうことはできることではない。まず沈黙のうちに味わうことから、そのものの真実を知る歩みが始まるのではないだろうか。別の言い方をすれば、味わうという行為は、“ゆっくり”と自分がむきあう相手と交渉・交流してゆくこととも言える。現代社会の潮流が、より速く、より大量に、より高度に、自分がでくわすものを情報とみなして処理してゆく関わり方を指向していることについてはあらためていう必要もないだろう。しかし、私たちがホモ・サピエンスと自称しうるのは、真に「味わう人」となることによってであるとするならば、私たちは改めて自分の状況をゆっくりと味わう暇とゆとりを見いだすことから始めなければならないだろう。それがホモ・サピエンスたる人間の自己実現の第一の課題かも知れない。

ローマの詩人ホラティウスは、その書簡でこう語っている。

「勇気もて味わう人たれ。いま始めよ。正しく生活することの時を延ばす人は、河が流れやむまで待つ田舎人のごとし。」